

四国農学連報

第25号

発行者 四国地区農業大学校
編集者 香川県立農業大学校
発行所 香川県立農業大学校
発行所 香川県立農業大学校

私の今までと

これからの農業

四国地区農業大学校学生連盟会長
香川県立農業大学校学生自治会長

橘 颯斗



私の家は兼業農家で稲作をしており、小さい頃から繁忙期には手伝いをして

いました。手伝いを始めた当初は楽しいという思いが強くなりましたが、中学生くらいになると、「もっと農作業の時間を短縮できるのではないか」、「この作業は必要なのか」と疑問に思うことが増えてきました。そして今の私がある転機となった、農業高校に入学しました。でもまだ当時は「もっと稲作について学ぶために」という動機でした。

農業高校に入学後、県内の農業者の話を聞く行事があり、参加しました。そこで先進的な農業経営をしているイ

チゴ農家に出会い、このことが私のイチゴに対する興味を大きくさせました。もっと知りたいという思いから、香川県立農業大学校の野菜園芸コースへの進学を決めました。

農業大学校への入学後は、毎日楽しく授業や実習をし、クラスメイトや先輩達と交流を深めながら、行事にも積極的に参加しました。そして一学年の終わりに、これまでの行動が認められたのか、学生自治会長に薦められて、これを受けることにしました。

学生自治会長に就任すると、今年が農学連の当番県ということもあり、仕事も多く大変でした。しかし、役員や先生・学生の皆に助けってもらいながら、無事にスポーツ大会や意見発表会を終えることができホッとしています。また当校の行事、農大ふれあい市でも学生全員が協力し、積極的に活動してくれたため、とても活気があつて、生徒も来場者も楽しそうな印象でした。実際は相次ぐ台風などの天災の影響もあり、農産物の出荷についても

心配でしたが、関係者の方々の協力により無事に終えることができ、学生自治会長として少し誇らしくなりました。私自身、会長という立場は苦手でしたが、これらの活動により良い経験ができました。

農大を卒業後に私は今住んでいる地域の農地と伝統を守っていきける農家になりたいと考えています。ただし、今の私にはその力と知識も足りないことを自覚しています。

まずは、知識や力をつけるために、三年ほど農業法人で勉強し、それから独立しようと考えています。独立してからは、農地の受け入れや、私以外にも農地を守ってもらう仲間を見つけるために農業体験などを通して、農業にふれやすい環境づくり、今は衰退している郷土野菜の振興などに取組んでいきたいと考えています。

最後に学生自治会長という立場に立ち、農大ふれあい市などのイベントを通して私自身が成長することができました。また、農大で出会えた皆との日々はどれも良い思い出であり、良い経験でした。この関係が築けたことが宝物のような気がしています。この農大に入学してできた絆や経験を生かし、私の夢に向かってこれからも頑張っていきます。



農大ふれあい市の様子



農学連スポーツ大会の様子

農業は柔軟な考えで

香川県立農業大学校

校長 高橋 清



ここ数年、日本における社会環境、農業を取り巻く環境が急激に変わってきていることを強く感じます。

一つはスマート社会、もう一つが少子高齢化です。

情報処理機器の活用は、私の世代よりも、学生の皆様の方が、手慣れている分野かもしれません。スマホが普及し始めて、わずか一〇年。今では世界の隅々まで広く普及しています。情報のボーダーレス化が急速に進んでいます。

また、現在、第四次産業革命と言われており、すべての「モノ」がインターネットに繋がるデジタル社会も目前に迫りました。

農業でも、経験と勘に頼っていた部分を、ビックデータの活用や各種データを横断的にリンクさせ、数値化することで、一定の規則を導きだそうとしています。こういったスマート農業が、技術の伝承が難しかった農業を、初心者にも分かりやすく取り組み

やすいものとなるよう手助けすることが、現実味を帯びてきました。皆様には、経理を含めて栽培環境や労働配分を数値化し、分析・最適化する能力が求められることとなります。

もう一つが、少子高齢化。日本の人口は二〇一〇年をピークに減少に転じています。農業就業人口に限れば、この二〇年で一七五万人にまで半減いたしました。入管法の改正が平成三〇年一二月に行われ、農業を始めた人手不足な業種に、外国人就労者の拡大によって労働力不足を軽減していくもです。

近年、農業大学校を卒業した人の多くが、進路として農業法人を選ばれています。現在、大規模な農業法人の多くの従業員・研修生に適切な指示を出して、効率よく業務回していく、マネージメント力やコミュニケーション力もこれまで以上に求められてくると思います。

スマート社会、多くの外国人労働者、この二つは今後の日本経済を大きく変えていくことになると考えられます。農業もしかりです。

私は、農業は伝統産業と構造がよく似ていると常々思っています。長い歴史に培われた、高い技術を持った伝統産業。伝統工芸を例にとれば、生産量は年々減少し、ピーク時に比べて五分の一にまで落ち込んでいます。ライフサイクルの変化や、安い外国製品に押されて、国内での需要が減ってきてい

ることで、文化の継承が危ぶまれています。高い技術だけに習得するのに時間がかかる、門外不出による閉鎖性、時代の変化によるマーケットの縮小等です。

そういった中でも、発展している企業は、敷居が高いと思われがちな伝統工芸品に、既成概念にとらわれない新しい発想を自由に取り入れ、人々の心に響く作品を生み出しています。

これまでの殻を打ち破り、伝統に自由な発想をプラスし、伝統工芸の美しさを日常生活に取り入れるよう、今の時代にあつた新しい使用方法を考える、カラフルで遊び心たつぷりなこれまでにない色使いを行うなど、古き良きものを活かす、需要を開拓しています。

農業分野においても、他産業から農業参入され、新しいアイデアやビジネスモデルを持ち込み、ビジネス展開させている方々があります。

皆様は、二年間の農業大学校の在籍期間中、プロジェクト課題に取り組みれます。調査研究では、課題の設定の背景、仮説の設定、計画の立案、実証試験、結果の検討、残された課題の洗い出しと、PDCAサイクルに沿って、論理的なものごとを考える訓練を行います。

皆様には、社会人になられた後も、農業大学校で学んだPDCAサイクルの考え方を活かし、柔軟な考えで、急激に変化する時代の流れを読み取り、複雑なパズルを解いて欲しいと願っています。

農大に入学してから学んだこと

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
農業生産技術コース 一年

三枝 光



私が徳島農大に入学してから、既に八カ月以上が経ちました。

農大では農業に関する様々な講義の他に、実習の時間がたくさんあり、いろいろな経験をすることができています。私は農大に来るまでは農業の経験がありませんでしたので、入学当初は農業に関して具体的に何を学ぶかは決まっていませんでした。しかし、農大で実習を重ねるうちに、畜産について、なかでも牛の飼育の研究をしたいと思うようになりました。

畜産実習の一環で、畜産研究所の職員の方による一般の畜産農家の指導に同行した時のことです。それまでは畜産研究所の飼育環境しか見たことがありませんでしたので、実際の畜産農家の状況を見たときには愕然としました。印象に残ったのは牛舎の衛生環境です。畜産研究所ではほとんど気にならなかったハエも、見学させていただけいた牛舎では数多く飛び交っていました。畜産研究所では牛舎の外に、放牧できるスペースがあるので、牛が外に移動している間に牛舎の掃除ができま

すが、訪問先の農家ではそのようなスペースはありませんでした。牛がいる状態での清掃では徹底しにくいし、それほど頻繁に掃除をするわけにもいかないのだと思います。また、その牛舎では、それぞれの牛が一頭ぎりぎり入るほどのスペースに繋ぎ飼いされており、かなり窮屈そうな印象を受けました。中には、脚に炎症を起こしている牛もいました。とは言っても、決してこの農家が飼育環境の整備を怠っているというわけではないと思います。育てている牛を売り、限られた収入や人手、時間などの中で精一杯やりくりした結果がこれなんだと思います。

こういった現状を目の当たりにすることで、一つの疑問が生まれました。それは、飼育環境の違いは子牛の成長にどう影響するかということです。子牛は、母牛の初乳に含まれる免疫抗体が含まれていて、これを飲むことで免疫を獲得します。しかし、この抗体は一時的なものであり、自分で抗体を生産できるようになるまでは、病気に感染しやすくなります。そのため、換気や衛生管理を徹底し、病原体を極力子牛に接触させないようにしなければなりません。

また、子牛は寒さによっても、下痢や肺炎になりやすくなります。ですから、体温を奪われないうように牛舎の温度管理にも気をつけなくてはなりません。このような衛生管理や温度管理は子牛が病気になるないようにするための飼育管理ですが、飼育環境が子牛の

成長に与える影響はそれ以外にもあるのではないかと思います。

徳島農大では、学生一人ひとりが独自の研究プロジェクトを考え、卒業論文の形でまとめます。私は、前述した「飼育管理の違いが子牛の成長に与える影響」について研究します。畜産研究所で飼養されている子牛と一般の農家さんで飼養されている子牛の免疫等を比較し、環境の違いが牛にどのような影響を与えるか調べます。もし免疫力が増すことで、より健康な牛が育ち、さらに肉牛としての販売価格が高くなるなどの影響があることが明らかになれば、一般の畜産農家の方々も今まで以上に積極的に飼育環境を整えるようになるのではないかと思います。

食用肉としての牛や豚は人間に食べられる為に生まれてきているという言い方をする人もいます。言い方は残酷ですがこれは紛れもない事実でしょう。家畜たちは私たち人間が現在の食生活を維持するためには必要不可欠な存在で、それはこれからも変わらないと思います。だからこそ、せめて彼らが生きている間くらいはストレスをできるだけ取り払ってあげたいです。

私が畜産について興味を持って半年と少しであり、牛のことで分かっている点も多いです。これからもっと牛についての知識や技術を身に付け、彼らが少しでも良い環境でその命を全うできるように貢献していきたいです。



校外販売研修にて

農業と私の夢

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
農業生産技術コース 一年

西上大貴



「ばあちゃん、手伝おうか?」、
「ほんまで、ありがと、うれしいわ。」

これが、私と農業の最初の関わりです。私の祖母は農家ですが、両親は非農家で、特に農業とは関係なく仕事をしています。中学の頃は私は将来何をすればいいのか、どういう夢を持てばいいのか、本当に分かりませんでした。

そんな時に祖母から送ってもらった野菜やお米を食べたら、とても美味し

かったのを覚えています。それをきっかけに、農業を将来の職業として考えるようになりました。

私は農業をしてみたいと祖母に相談しました。祖母は大変喜んでいましたが無理に農業を勧めませんでした。農業は体を使う仕事で夏の暑さにも耐えていかななくてははいけません。祖母はその大変さを知っていたので心配していたのです。

実際に農作業を手伝ってみると、確かに大変でした。私は本当に農業を続けていけるのかと将来が不安になりました。しかし何とか最後まで手伝いを終えると、それまで味わったことのないような達成感を覚えたのです。その一瞬一瞬は大変でしたが、この農作物が元気に育つと思うと、とても嬉しく思いました。この時初めて生産者の気持ちを実感することができたような気がしました。そして私は、農業を将来の職業として選ぶ決心をしたのです。

私は農業について何も知らなかったのですが、農業高校に入学しました。私の高校の先生は面白く、時に厳しい良い先生でした。三年間その先生のもとで、農業を学んだことで、忍耐力や観察力などが身に付いたと思います。

高校では、販売の実習などもしていました。自分達で作った農作物を消費者に売ることで、人との接し方や売り方を学ぶことが出来ました。「あなたの高校の農作物はおいしい」と言ってくれた時はとても嬉しく思いました。

私は農業高校を通して学んだことを

忘れず、次に活かしていきたいと思いをしました。

私は高校を卒業し、農業大学校に入学しました。今は、高校よりも本格的なことを学んでいます。自分で農作物を育てるのはもちろん、その計画や成果を人前で発表しないといけません。私にとっては簡単ではないですが、様々な活動を通して、農業についてより深く学びたいと思っています。

また私は、もう一つ学びたいものがあります。それは、エシカル消費です。エシカル消費とは、人と社会、地球環境、地域のことを考慮して作られたものを購入し、消費することを言います。そこで私は農業大学のプロジェクトの一環としてエシカルな消費や生産について取り組みたいと考えています。

私は白ナスに興味があります。プロジェクトの内容としては、白ナスのオーガニック栽培や生産者の負担が少ない栽培、出荷の方法、消費者への周知の方法、そして、得られた利益で地域社会に貢献する方法など、エシカルの観点で、現状のナス生産の課題を見つけ出し、解決していきたいと考えています。

私は将来農家を目指していきます。農家は農産物を生産していますが、消費者でもあります。消費者でも生産者でもある私はエシカル消費だけでなく、エシカルな生産を常に心がけ、実践していきたいと考えています。

私は、徳島だけでなく、日本、ひい

ては世界へ貢献できる農業経営者となるのが夢です。私はその方法としてエシカルがいいと考えました。エシカルには「影響をしっかりと考える」という意味もあります。日本は世界に対して大きな影響力を持っています。私達日本人がエシカルに対する意識を深めれば、世界にもより良い影響を与えることにつながるのでは、と考えています。

とはいえ、いきなり大きなことが出来るとは思いません。私はエシカルな生産で利益を上げ、その利益の一部を地域やユニセフへ寄付し、困っている人々の助けとなることを当面の目標にしたいと考えています。

日本は古くから思いやりの精神やおもてなしの考えを大切にしてきました。私はその精神を忘れることなく、農業経営者として力を尽くせるように頑張りたいと思います！



四国ブロック意見発表会にて

農業大学に入学して

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
生産技術コース 二年

西 條 文 那



徳島県立農業大学校に入学をし、はや二年が経とうとしています。今思い返すと、私の大学生活二年間は沢山の人の支えられてきたものでした。

農業高校出身の私は、受験生である高校三年生の冬、先生に徳島県立農業大学校を勧められました。高校では、徳島の伝統文化である藍染に取り組み、徳島大学でもその研究がされていることを知り、正直なところ、徳島農大には行ってみたいという気持ちは持っていました。ですが、一歩を踏み出せずにいました。それは、私の家は非農家で、徳島農大を卒業した後の自分の将来に不安を感じていたからです。そんな私に当時の担任の先生が、「農業は畑をやるだけが全てじゃない、色んな形の農業がある」と言ってくださり、その一言で勇気づけられ、徳島農大への入学を決めることができました。

農業高校出身ではありませんが、入学当初は同期のみんなの方が何倍も農業に詳しくて、正直ついていけないのか不安でいっぱいでした。ですが、仲間や先生方の助けがあり、高度な農業の技

術や知識を深く学ぶことができました。大学には色々な行事があり、楽しい経験もたくさんしました。初めての行事は新入生歓迎会で、先輩がバーベキューを振る舞ってくださり、おかげでみんなの仲を深めることができ、先輩方には感謝しています。また、四国農学連スポーツ大会では本気で何かに取り組む大切さや、他県との交流など滅多に出来ない経験をさせていただきました。初めての販売行事である農大祭では想像以上の賑わいで驚きましたが、農大生が一致団結し、無事農大祭を成功させることができました。そして、一年生の頃が一番と言ってもいい思い出は、みんなで登った剣山です。山に登ることが初めてで、とても大変で何度も挫けてしまいましたが、仲間や先輩の励ましや応援のおかげで、仲間や先輩の励ましや応援のおかげで、後の達成感で疲れも吹き飛び、その時感じた感動は今でも忘れられません。

そんな色々な経験をしていく中で、あつという間に一年が経ちました。あまり成長したとも言えない状態で、二年生になることに對する自信を持っていないところ、先生から「自治会長にならないか」という話をいただいたときは、茫然としてしまいました。

一年生の時、自治会に入っていないながら私に務まるのかと不安でしたが、周りに背中を押され自治会総会で全校生徒と先生方の前で会長としての意気込みを語った時に覚悟が決まり、責任を持ち自治会長になろうと決断しました。

自治会長になった私は、今までの様

ではだめだと思ひ、進んで行動していきこうと思ひました。行事のたびに忙しく、毎日プレッシャーで押し潰されそうでした。そして、そんな会長としての務めの中で一番大変だったのは農大祭です。三か月前頃から段取りやイベント内容などを決めるため、日々仲間と一緒にパソコンに向かっています。その成果もあり農大祭は無事に終えることができました。二年生になってからは学生としてやることや、自治会長としての仕事が増え、いつも逃げ出したいと思っていました。ですが同期のみんなや先生方がいつも学校の行事ごとや生活面でのことなどを支えてくださり、会長としての責務を果たす事ができ、皆さんにはとても感謝しております。

もう残り少ない大学生活となり、卒業が近づくとやはり寂しくなります。入学前は、徳島農大に入学をし、将来何になるのだろうかと不安を感じていた私でしたが、今では農業に関連した企業に就職も決まり、高校生の時の不安が不思議なほど大学生活は充実したものでした。そして、このように感じているのは大学生活を見守ってくれた家族のおかげであり、いつも私を支えてくれた同期のみんなやいつも優しく時に厳しく農業の知識を教えてくださいました先生方のおかげだと感じております。徳島農大で得たものは絶対に他では経験できないことばかりなので、忘れず胸に抱き、この先も頑張っていこうと思ひます。



農大祭にて

徳島農大そらそうじゃ 社長として

徳島県立農林水産総合技術センター農業大学校
アグリビジネスコース 二年

西 将 志



私は、祖母の畑仕事を幼い頃から見ており、いつか自分も野菜を育ててみたいと思つた。

になりました。農業高校に入学し三年間農業について学びましたが、より専門的な知識を身につけたいと思うようになったことが農業大学校に入学したきっかけです。初めての親元を離れた学校生活が始まりました。高校の時よりも実習の時間が増え、そのうえ慣

れない独り暮らしと学業の両立は最初はとても苦労しましたが、同じ志を持った仲間とともに協力しながら、充実した二年間を送ることができました。農大の実習では、自分たちで畝を立てて栽培管理をし、育てた農産物を収穫、出荷調整して、校内の産直市や校外のイベント等で販売活動も体験しました。私の通っている徳島農大には模擬会社「そらそうじゃ」があります。入学と同時に社員となり、私も社員の一人として一年次から販売実習などの活動を行ってきました。色々な活動をしていく中で周囲から「そらそうじゃ」の代表就任の打診がありました。悩んだ結果、自分に務まるのか不安でしたが、周りからの後押しもあり、代表就任を決意しました。

「そらそうじゃ」では学校の敷地内に設置した「きのべ小屋」という販売所で「きのべ市」として産直市を定期的に開き、お客様とコミュニケーションを図りながらその日に採れた新鮮な野菜をお手頃な価格で販売しています。さらに「出張きのべ市」として、県内外のイベント等の販売実習にも積極的に参加しています。また今年度は徳島県と株式会社キョーエイ(県内のスーパーマーケット)と徳島農大「そらそうじゃ」が農業の担い手育成に向けて締結した連携協定に基づき、キョーエイ店舗で野菜や加工品の販売実習を行いました。私も販売員として販売実習に参加し、私たちが育てた農産物を買っていただくと、とても嬉しくな

り、もっと良い物を作ろうと思う気持ちが湧いてきました。また県外の販売実習にも参加させてもらいました。「物を売る」ということは楽しさや嬉しさもあると同時に難しさもあることを学ぶことができました。学ぶことができました。また、「そらそうじゃ」のボランティア活動の一環として「徳島県農村漁村応援し隊」の担当役員も兼任しています。農村漁村の「人手がほしい」「農村に来てほしい」等のニーズと、「そらそうじゃ」側の「地域に貢献したい」「集落の人と交流したい」等のニーズを結び、協力し合って活動しています。今後も、農村地域での活動を行い、地域の人たちとの交流を深め地域活性化に取り組んでいきます。

代表としての任期も残りわずかとなりました。就任してからの一年間を振り返ってみると、代表として至らぬ点も多く、社員の皆に迷惑をかけたことも多々あったと思ひますが、私と一緒に頑張って日々試行錯誤し、「そらそうじゃ」をより良くしようと思ひ努力してくれたことに感謝しています。私自身も貴重な経験をさせていただきました。次年度以降後輩達が、「そらそうじゃ」の活動をさらに発展させてくれると信じ期待しています。私は徳島農大に入学してほんとうに良かったと思ひます。私の学校生活が充実していたのも先生方や仲間が支えてくれたからだと思ひます。卒業後は農大での二年間の経験を糧に、未来の農業を支えるべく志を高く持ち、一歩ずつ前

進んでいきたいと思えます。



県外販売研修にて

自治会長として

一年振り返って

愛媛県立農業大学校 学生自治会長
総合農学科二年 果樹コース

青野 有希



私は、昨年四月に愛媛県立農業大学校の学生自治会長に就任しました。先代の二宮会長

が何事もスムーズに役割を果たしていた為「自分で大丈夫なのか」という不安でいっぱいでした。しかし、自治会役員や、先生方のご協力もあり、収穫祭などの諸行事を無事に終えることが

できました。こうした、諸行事を行う中で、一人で仕事を抱えこむのではなく、農大生全体で支えあうことの大切さに気づかされました。

自治会運営にあたり、力を入れた活動があります。一つ目は、香川で開催された四国農学連スポーツ大会です。毎年、激戦の中、愛媛農大の先輩方は優秀な成績を残してこられました。今年も、バトミントン、野球、卓球、バレーの四種目を制覇することができました。これは、普段の練習を一生懸命頑張り、学生が一丸となった結果だと思います。

二つ目は、高校生を対象とした、宿泊形式で農大を見学・体験できる就農啓発講座です。今年も県内外からの多数の参加をいただきました。高校生に農大の寮生活や実習等を在校生と一緒に、実際にどのような環境で農大生活を送っているのかを体験してもらいました。体験以外に食事会や意見交換等も行いました。意見交換では、自治会役員と寮長が高校生からの質問に答えました。

三つ目は、農大のメインイベントでもある収穫祭です。今年も三千人以上の方がご来場くださりました。子どもからお年寄りまで幅広い年齢層に楽しんでもらえるように、自治会を中心に子ども向けのクイズラリーや親子共同収穫体験、農大産もち米を使った餅まき等、様々なイベントを行いました。私達の活動を地域の方々を知っていただけのではないかと思います。

今年七月に発生した西日本豪雨は、報道等でご承知のとおり甚大な被害をもたらしました。幸いにも本校の学生、教職員は皆無事でしたが、学生の中には農地や家屋に大きな被害を受けた者もいます。本校施設、圃場等につきましては土壌流出等の被害はありませんでした。しかし、西予市野村町、宇和島市吉田町では、現在も復興作業を行っています。本校の学生も吉田町の農家さんのところに復旧のお手伝いに行きました。現地の悲惨な状況を直接目の当たりして、災害の恐ろしさを実感しました。

また、宮城県立農業大学校さんから、メッセージ付きの応団幕を送っていただきました。その応団幕は、収穫祭において、西日本災害における被災状況や被災した学生のコメントを載せたパネルと併せて掲示しました。宮城農大の皆さんから頂戴した心温まるお見舞い、ご支援を糧に本校生の心身のケアも充分に配慮しながら一同邁進したいと思っております。

この愛媛県立農業大学校で過ごした二年間では知識や技術だけではなく、大切な仲間に出会うことができました。二年間の学校生活を共に過ごした仲間を今後も大切に、卒業後もいろいろな情報を交換していきたいです。

最後に、自治会長を務めてリーダーとしての責任の重さや重要性を実感することができました。不安でいっぱいだった就任当時に比べて大きく成長することができました。この貴重な経験を活かして

て、将来は地元の基幹産業でもある柑橘を盛り上げて、引っ張っていきけるような農家を目指していきたいです。



果樹コースの仲間たちと共に

愛媛の農業に貢献したい！

愛媛県立農業大学校
総合農学科二年 農産園芸コース

高須賀 正浩



私が、初めて農業に触れたのは小学生の時、祖母の営む田畑を手伝ったことです。そ

の頃は、祖母の作るおいしい米や野菜が食べられて、とても幸せでした。しかし、その後年齢を重ねた祖母は「もう一人じゃ管理しきれないから、米作

りはやめる。」と水田を手放すとともに、管理する畑の面積も縮小してしまいました。私はあの時の祖母の悲しい顔を今も忘れることが出来ません。私はその顔を見て、将来農家になろうと決心しました。

その後、私は農業高校に進学し農業の基本的なことを学びましたが、この頃あることで悩んでいました。それは、自分が将来何を栽培し農業を営むべきかと言うことでした。当時高校のバイテク班にいた私は、「胡蝶蘭」など花き栽培に関わる機会が多く、野菜栽培よりも花を栽培してみたいと言う漠然とした気持ちを持っていました。

高校二年生の時、愛媛県立農業大学のオープンキャンパスに参加した私は、愛媛県が作出したデルフィニウムのオリジナル品種「さくらひめ」の収穫・調製とラッピング作業を体験しました。実際に作業を体験してみると、『収穫に至るまでにはどのような栽培管理をして来たのだろうか』と言うことが気になり、『もっとこの花のことを勉強してみたい』と強く思うと共に、『やはり花き栽培をやってみよう』と言う思いが自分の中で明確になって来ました。

その後、愛媛県立農業大学校へ入学した私は、花き栽培を専攻しました。専攻実習では、念願の「さくらひめ」を始め、「トルコギキョウ」や「ヒマワリ」など切り花の栽培管理や収穫調整を行うとともに、鉢物の播種や追肥、葉かきなど多くの作業について学

んでいます。高校では教わることの無かった専門用語に戸惑い、難しい作業に苦戦することも多いですが、分からないことは、担当の先生や実習助手の方々に質問しながら少しずつ知識や技術を身に着けることが出来ていると思っています。

また、収穫調整した花を、毎週水曜日に行われる「農大市」で販売しており、荷詰め等の販売方法や接客についても学ぶことが出来ています。また秋の「農大収穫祭」では、私自身が制作した「寄せ植え」を販売し、お客様に購入していただくことが出来ました。

本校では、一年生は二週間、北海道の士別市で農家実習することになっています。そこで私は、「野原農園」という法人経営でお世話になり、カボチャの定植とトマトの管理作業を体験させていただきました。愛媛県とは違う、北海道の大規模農業を直に体験することが出来ました。また北海道らしく、定植したカボチャの苗が寒さのため駄目だめになってしまおうということが起こり、農業は自然と密接に関係していると感じました。この他にも多くの貴重な体験をさせていただきました。

農業大学校に入学してそろそろ一年が経とうとしています。この一年間学んできたことは、どれも他では体験できない貴重なものです。更に「農業技術検定」や「大型特殊自動車免許」など多くの資格も取得することができました。今は、将来をどうするか具体的に

には決めてはいません。しかしこれからも花き栽培をはじめとする多くのことを学んで行き、愛媛県の農業に貢献出来るような将来に行きたいと考えています。



スターチスの出荷調整 (本人左端)

将来の夢

「酪農を仕事にしたい！」

愛媛県立農業大学校

総合農学科一年 畜産コース

松原 悠子



私の将来の夢は、畜産関係の仕事に就くことです。しかし、農業高校に入学

した時点で畜産関係の仕事ではなく、動物園の飼育員になるのが夢でした。では、なぜ将来の

夢が変わったのかというと、それは私の高校生活での経験が関係しています。

高校一年生の冬休みにアイガモの解体実習をしました。一人一羽、暴れるアイガモを無理矢理押さえつけ、頸動脈を切り、逆さにして動かなくなるまで待ちます。そして、羽を抜いた後、部位ごとに解体して行きます。私は、自分の手で命をうばった生き物の血が流れるのを初めて目の当たりにしました。いくら「命を大切にしましょう」と呼びかけても、人間がどのようなことをして、豚や鶏など家畜の肉がスーパーに並んでいるのなんて考えはしないでしょう。あまり公にされていないことを身をもって実感することができ、命の尊さ、大切さを本当の意味で理解することができたと思います。これは忘れてはいけないものだと思います。解体したアイガモを鍋にして食べる時、噛み締めながら食べようと決めていたのに、食べたらいよいよあつというまに食べてしまっていました。私は、「人間って怖いな」と思いました。同時に、家畜のありがたみなんてすぐに忘れてしまうのではとも思いました。私は、この事がきっかけで、「家畜の近くにいられる仕事に就きたい」と考えました。そうすれば、家畜のありがたみを忘れずにいられると思ったのです。

私は、更に深い知識を学び、自分が知らないことをどんどん発見していきたいと思いい、高校卒業後の進路として、愛媛県立農業大学校への進学を選

びました。

現在私は、畜産コースを専攻し勉学に励んでいます。寮生活では、周りを見て行動すること、身の回りのことを自分ですることの大変さを日々感じています。六月には「北海道農業体験実習」に参加し、北海道士別市の山岸さんと言う酪農家で二週間ホームステイで実習を行いました。牛の飼養管理は初めてで、戸惑うことが多かった私ですが、山岸家のみなさんが優しく丁寧に教えてくださり、愛媛では体験出来ないことを山ほど経験することができました。

実習は朝五時に起床し、六時からほ乳と搾乳を行いました。ほ乳する子牛は四頭いて、バケツでのほ乳子牛二頭、ほ乳瓶でのほ乳子牛二頭でした。初めて見た小さな小さな子牛でした。酪農の仕事はもっと力仕事だと思っていました。ほ乳はとて繊細でした。教えていただいた通りの手順、内容で行わないと子牛はすぐに体調を壊すと言われました。言われた通り、私がほ乳を始めてから五日目に子牛がミルクを飲まなくなり、息も荒くなっていました。自分はちゃんとしてたつもりでも、出来ていないということを感じました。

それからというものが、これまで以上にミルクの温度や手順に気を付けながら行っていました。それでも、その日の気温によってミルクの温度も変化していくのが難しく、全然上手く出来ませんでした。

ほ乳の後は、搾乳のお手伝いをしました。乳房の消毒やミルクの着け外しをさせていただきました。自分の不器用さ

に悔しさを覚えながら、毎日ひたすら、「丁寧」を心掛けて取り組みました。だんだんと上手く出来るようになり、とてもやりがいを感じました。

他にも、牛の出産に立ち会いました。逆子だったため、子牛の足にロープを括りつけ、おもいっきり走りながら引つけました。無事に産まれた時は、この上ない安堵感と幸福感を味わうことが出来ました。

こうして、二週間初めてなことばかりの貴重な体験を沢山させていただきました。今までは教科書の中だったものが現実となって体験することができました。一生の宝です。

自分がやりたい事がどんなに大変か、それと同時に夢のような時間だったと思える日々でした。そして、命をあずかり、それをたくされる、その重さを実感し、私はやり続ける達成感を知りたいと思いました。私は、酪農というものに更に興味を湧いてきました。「畜産関係の仕事をした」という漠然とした夢から「酪農がしたい」という具体的な夢となった瞬間でした。

四月の入学以来、農業大学校の実習でも、鶏、豚、肉牛、乳牛の飼養管理を一通り行いましたが、今では酪農を選択し、飼養管理・哺乳・搾乳をしています。学校の実習で、北海道で学んだことを生かすことができていて、北海道実習頑張つてよかったなと思います。

卒業後は、乳牛の飼養管理業務に就ける農業法人等に就職したいと考えています。そのためには、必要な資格や活用の

出来る資格を沢山とり、知識を身につけたいと考えています。まずは、「人工授精師」の資格を取り、将来の夢に少しでも近づけるように頑張っていきます。自分がやりたいことを悔いなくできるように、そのための力と武器を携えていけたらいいなと思っています。



乳牛共進会にて自分が引いた牛と

みかん農家としての想い将来の夢 消費者との相互理解を深めて！

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年 果樹コース

山藤 慶 富



私の家は専業農家で、宇和島市吉田町という宇和海に面したリアス式海岸の急峻な農地で

温州みかんを主とした果樹経営を営んでいます。現在は、父と祖父、そして義理の兄の四人が農作業に従事しています。果樹園の総面積は四ヘクタール。栽培品目は、温州みかんとポンカン、それに宇和ゴールドです。

ご承知のとおり、今年の夏、愛媛県は大変な災害に見舞われました。吉田町も、あちらこちらで土砂崩れが起こり、多くの農家が、大きな被害を受けました。幸い我が家は、直接の被害を受けることは無かったのですが、見慣れた野山が崩れたり、路地が土砂に埋もれた様子を目の当たりにして、改めて自然災害の恐ろしさを思い知らされました。

私は、地域の復興に少しでも役立ちたいと考え、可能な限りボランティア活動に参加しましたが、このなかで私が驚いたのは、全国からとても沢山のボランティアの方達がお越し下さっていたことでした。被災者の人たちも大いに勇気づけられたことと思います。本当にありがとうございました。

ところで私は、子供の頃よく父親に連れられみかん山に登り、作業の手伝いをしていました。そして休憩の時には、我が家のみかんを、山から見える海や自分の家の周りの景色を眺めながら「美味しい、美味しい」と言って食べたものです。収穫したみかんの選別や出荷作業もよく手伝っていました。中学三年生になり、高校進学を考えるようになった頃には、家業のことをより意識するようになっていました。

「みかん農家を継ぐためには、農業に
関してより多くの知識を学び、身に付
ける必要がある」と考え、私は、愛媛
県立三間高等学校の農業機械科に進学
しました。

三間高校では、カリキュラムの中で
様々な農業実習に取り組みましたが、
中でも、私にとって「食」と「農業」
の重要性について思いを深くするきつ
かけとなった実習がありました。その
実習とは、高校一年生の時に実施し
た、小学生との連携による稲作体験学
習です。小学生と一緒に育苗、田植
え、稲刈りといった一連の米作りを体
験すると言ったのですが、これまで
当たり前のように食べていた米が、収穫に至
るまでにはいかに多くの手間が必要で
あるか、とやることを思い知らされた
体験でした。

私は、この実習以降、米粒を一粒も
残さないように食べるようになりまし
たし、食事の際に言わなくなっていた
「いただきます」や「ごちそうさまで
した」という感謝の言葉を自然と口に
するようにもなりました。これも農
業の存在のありがたみを身をもって感
じることが出来たからだと思っています。
そして、我が家のみかん栽培について
も、人々の「食」を司る農業の一翼を
担う素晴らしい職業であると思うよう
になり、「我が家の農業を継ごう、い
や、継ぎたい」という思いが、より一
層大きくなりました。

高校三年生の授業で、「スーパーな
どで加工された魚しか見たことの無い

子供は、魚は切り身で泳いでいると思
っているらしい」と言う話を聞きまし
た。私はこの時、この話は少しオーバ
ーであるにしても、子供達の食材に対
する認識の無さを言っているのだなど
思いました。食材に対する認識の低さ
は、食材を粗末にする心につながる
私は思います。それ故に、今の日本に
は「食育」が大切で、そのためには、
農林水産業に携わっている若者が、直
接子供達に食べ物のありがたみを教え
る必要があると思います。そこで私自
身も更なるスキルアップを目指し、愛
媛県立農業大学校への進学を決意しま
した。

私は農業大学校の2年間で、みかん
農家を継ぐための知識や技術と共に、
子供たちに「食育」を教えるための知
識も身につけたいと考えています。

現在私は、農業大学校の実習を通
じ、みかんはもちろんのこと、ぶどう
や桃、梨やキウイなど、色々な落葉果
樹の栽培技術の習得にも取り組んでい
ます。我が家では、今のところ柑橘類
しか栽培していませんが、将来、我が
家の農業を継いだ時は、農業大学校で
学んだ知識や技術を活かし、落葉果樹
も経営に取り入れ、幅広く消費者に果
物を供給したいと考えています。

私たちが食べている農作物は、すべ
て私達のために、誰かが思いを込めて
栽培してくれたものです。ともすれば
私たちは「食べられて当たり前」とい
う気持ちになりがちで、消費する側と
生産する側の心が離れてしまっている

のではないかと感じています。私は、
消費者と理解し合い、食べ物への感謝
の心を常に持ち続け、楽しみながら農
業を営む。そんな「みかん農家」にな
りたいと思っています。



柑橘収穫ボランティアに参加

農大での経験と 卒業後の目標

高知県立農業大学校
園芸学科二年 野菜専攻

山 中 健 生



私は、昨年の
二月に高知県立
農業大学校の学
生自治会長に
就任しました。

また四国農学連
の四県自治会の副会長にも就任し、私

自身このような役割には就いたことが
なく、役職に見合った仕事ができるの
か、最初は不安がありました。

しかし、四県自治会の会長がしっか
りと周りを引っ張って行ってくれ、ま
た、先生方の協力もあつたおかげで、
スポーツ大会などさまざまな行事ごと
を、何事もなく終えることができました。
様々な行事を行っていく中で、学
生自治会だけで取り組むのではなく、
先生方や学生全体で協力していくこと
が大切だと気づかされました。その他
に、私の学校では、高知の伝統的なお
祭りの「よさこい祭り」への参加、毎
年恒例の「農大祭」などがあり、その
都度、自治会を含め、学生同士で、支え
あいや協力があつたことで、様々な問
題があつても乗り越えることができ、
最後までやり遂げることができたと思
います。

私は農大卒業後、家の経営は継が
ず、ヤッコネギで独立就農をしようと
考えています。しかし、今の私には栽
培するヤッコネギに対する知識があま
りにも少なく、栽培経験も全くありま
せん。それを補うために、卒業後一年
半ほど、先進農家の元で研修を行う計
画を立てています。そこでは、実際の
経営、栽培方法や管理、設備などとい
ったものが学べるとともに、研修を行
っていく中で、たくさんの人達と出会
い、人とのつながりを広げていこうと
思っています。また、就農後は自分の
ハウスを建て、栽培に必要な灌水など
の設備や、経営を行いやすい環境を整

えていきたいと思っています。実際に経営を始め、最初は両親に支えてもらう中で、迷惑や負担をかけてしまうこともあると思いますが、いつかは、栽培規模を拡大しながら、雇用を生み、私が両親を支えていけるような、経営を目指していきたいと思っています。

この高知農大に入学して、多くの時間、作物と関わる事ができました。この時間は、自分にとって、とても貴重で良い経験にもなった時間だと思えます。授業では、様々な作物の特徴、基本的な栽培管理、設備・技術などを知り、将来、就農するための基礎の部分を学べたと思います。学校生活では、大切な仲間や後輩に出会うことができました。この出会いを大切にしていきたいと思っています。

最後に、高知農大の自治会長を務めてきて、責任の重さや、その役割の重要性を知ることができました。役員や学生達には、迷惑や負担をかけたと思いますが、私なりに精一杯できたと思います。この経験を大切に、また活かしながら、将来の就農に役立てていきたいと思っています。



農大祭での開会あいさつ

グローバルGAP認証 取得の取り組み

高知県立農業大学校
園芸学科二年 野菜専攻

林 舞 菜



本校では、一年の八月から昨年の十一月まで、トマトでのグローバルGAPの認証取得に向け、県

内外への視察や学習、実践に取り組んできました。グローバルGAP取得の目的は、国際化に対応できる次世代の農業人材の育成及び経営改善のためです。グローバルGAPという言葉は聞いたことがありませんでしたが、詳しい内容までは分かりませんでした。まず何か

ら始めればいいのか、そもそもどういう事をしなくてはならないのか、知識も全くなかった私達は、コンサルタントの方を迎え、講義を受け、少しずつ理解を深めていきました。GAPというのは、Good Agricultureの頭文字を取ったもので、農業生産工程管理のことです。グローバルGAPは農産物の安全規格の中で最も普及しており、食品安全、労働安全、環境安全の三本柱で構成されています。食品安全にはHACCPの要素があり、危害分析、リスク評価が求められています。労働安全には基本的人権、雇用契約、福利厚生など、環境保全にはIPM、汚染防止などがあります。

講義を受けて、必要な記録をすることやプロジェクトチームのメンバー内で作業の際に圃場や出荷調整室で起こりうるリスクを考え、そこから何をやるべきかを決めて、評価し、手順書、揭示物作成を行ってきました。例えば、農業機械の扱い方ひとつとっても始動前にやるべきこと、エンジン始動の仕方、片付け方等、確認すべきことはいろいろありますが、学生全員がそれらを把握できてはいませんでした。そのため、初めて使う学生が事故を起こすかもしれない、このリスクを低減させるための手順書を作成し、農機具庫の見やすいところに掲示しました。このように評価表作成↓手順書作成↓実践の形で取り組み、圃場内の整理整頓もやってきました。

これまで講義や評価表の作成などを通し、新たに分かってきたことがあります。例えば作物の出荷は出荷調整室で行い蛍光灯をつけて作業しており、何かのはずみで蛍光灯が飛散し出荷物に紛れると大変なことになります。誤って入らないように蛍光灯全てに飛散防止カバーを取り付ける必要があります。また、農薬庫についてはこぼれた時に広がりやすい液剤は農薬庫の下に置くなど、今まで大丈夫だろうと考えていたことが、グローバルGAPの視点から見るとそれぞれに課題があり、リスクの軽減を図る対応が求められていたことに気づきました。このことから、GAPの必要性を改めて理解することが出来ました。審査に向け、メンバーを集めての評価表作成及びGAP勉強会は基本的に放課後に週一回のペースで行い、このような手順を繰り返しながら、作業体系やIPMなどの専門的なリスク評価もまとめていき、最終的には二百をこえる項目の膨大な資料を作り上げてきました。

審査会の一週間前は本番さながらに、書類審査に対しての応対練習に取り組み、審査会本番に向け準備をしました。私自身はメンバーを代表して審査を受けることとなり、緊張と不安でいっぱいでした。昨年十一月一日と二日の二日間、本校で審査が行われ、初日は公開審査となりました。審査員の方からは、収穫したトマトは全てその日のうちに出荷するのか、ロット番号を付け、どこ

のハウスから収穫したトマトなのか廻れるかなどの質問をされました。練習のお蔭でなんとか対応はできましたが、マスバランスはとれているか(収穫・選果で入ってきた数と出荷で出た数が同じかどうか)という問いに対しては十分に答えることができませんでした。圃場に降りての現場確認審査では、書類審査と比べ、より実践的なことを聞かれましたが、全て回答することが出来ませんでした。二日目の書類審査も滞りなく終わり、講評、是正を受け審査会は終了しました。

グローバルGAPの認証を取得するためには、事前準備や資料作成など、時間と根気のいる作業が必要になってきます。私たちが取得に取り組み始めてから学校の雰囲気も学生の意識も少し変わってきたように思います。物がどこにあるか分かりやすくなったたり、自分から清潔にしようという行動したりと良い方に変わってきました。私たちのグローバルGAPは始まったばかりです。他校の皆さんもグローバルGAPの勉強も研修もされてきていると思います。グローバルGAPは自分達の作業や環境を客観的に見ることができ、より良い方向に導くみちしるべだと考えます。取得すべきとは言いませんが、実践してはどうでしょうか。

昨年十一月十九日付けで認証を取得しました。農業大学校では西日本初となります。今後も、いろんなことに挑戦していきたいです。



ほ場での現地審査

フルーツトマトで

「稼げるトマト生産団地」を作る

高知県立農業大学校

園芸学科一年 野菜専攻

吉良 和 恭



私の住む四万十町は県庁所在地の高知市から足摺方面に車で二時間ほど行った標高二三〇m程

度の高南台地と呼ばれる中山間地域です。しかし、地域では農業生産者の高齢化が問題となっています。二〇一五年度四万十町統計資料では、六五歳以上が人口の四二%を占めています。そんな四万十町に私はフルーツマ

ト栽培を中心とした団地を作ること、四万十町を全国からも注目されるトマト生産地域にしたいと考えています。フルーツトマトとは品種は大玉トマトで、糖度八度以上で出荷するものです。フルーツトマトは販売単価が、キログラムあたり八五〇円〜一〇〇〇円であり、収量についても、一〇年くらい昔のフルーツトマトの収量は、一〇aあたり四、五tでしたが、環境制御技術の向上により、現在は八〜一〇tのフルーツトマトの出荷ができるまでになっています。現在、静岡県「アメラ」など有名どころの産地はありますが、技術を伴うため競争産地が少なく、全国的にも面積の拡大に至っていません。

私の夢は、地元の農家や若い後継者が集いあい、地域ぐるみのトマト団地を作ることです。フルーツトマトを生産したいという農家にはすぐには言いにくいですが、農大などでの灌水方法は灌水及び施肥方法を教え、産地として規模を広げたいです。実際、まだ研究の段階ですが、二〜三年後には技術を確立し地域の人々には惜しみなく提供していきたいと思っています。

そして、フルーツトマトと言えば「四万十町の吉良だ」と言われるように知名度を高め、生産・販売を行い、最終的には世界からも求められるフルーツトマトを目指したいと考えています。

農業大学校では現在私はポット栽培を利用したトマトのフルーツ化を目指

しています。養液栽培は、ロックウールやヤシガラ培地に養液を送るシステムですが、私は、培地をポットの鉢に替えて、給液する方法を思いつき灌水量を調節することでフルーツトマトにしようと考えています。このポット栽培とは、根がポットから出ないように工夫した根域制限栽培です。ポット栽培は灌水施設があれば容易に栽培が可能であり、場所を選ばず、簡単に栽培が出来ます。そこが一番の強みだと考えています。

更にSNSの利用として、私は現在インスタグラムを利用し、トマトの写真をUPして、情報発信しています。

今後の目標として、まず私自身が、周りにうらやましがられるようなフルーツトマトの生産を行い、次の世代の後継者に、親世代が「継げ、継げ」というのではなく、自から継ぎたいと言われる経営を実現したいです。販売面では販路の確保として、市場取引のある仲卸さんなどと協力して青果については日本全国への出荷、フルーツトマトでの海外からの需要が韓国、ニュージーランド、カナダなどからもあるのでそういった需要のある国への輸出も考えています。

また、トマトでは過熟となったものや、果形が不揃いのものが生じることがありますが、トマトには糖尿病や高血圧、免疫力の上昇、ダイエットにも効果があると言われており、ドレッシングや冷凍トマトなどの加工品の研究も考えていきたいです。



トマトの誘引作業

更に世界認証の一つであるグローバルGAPを取得し、世界の消費者から求められる安全安心なフルーツトマトの販売を実践していきたいと考えています。農業大学校では昨年一月に、トマトでのグローバルGAP取得を目指し公開審査を行いました。徹底したリスク管理を行い、食品事故のないように安全管理に努めました。また、私は、ファームレコーズという記録を残すアプリを使い日々の実習を記録して作業内容も確認できるので毎日更新しています。将来のGAP取得を目指す際には、毎日記録をつけることや、リスクを見つけないような衛生管理を徹底していきたいと思っています。最後に、私はまだ、農業の世界に足を踏み入れたばかりですが、夢の実現に向けて頑張っていきたいと考えてます。

伝統を花で未来につなぐ

高知県立農業大学校
園芸学科一年 花き専攻

新橋 一生



私は人を笑顔にすることが好きです。そして花は、人を笑顔にする力があることを知っています。

私は、農業高校で草花コースを選び、ストックやパンジーなどの花を中心に学んでいました。最初は、花のことは全く知らず、代表的な花の名前も分からない状態でした。花を好きになるきっかけとなったのは、母の日のイベントでした。農業高校では、母の日に全校生徒にカーネーションの鉢を渡すという一大行事を行っています。そして、そのカーネーションは三年生の草花担当が苗から栽培することになっていました。ポリウム感を出すために摘心を何回もするなど栽培管理も大変でした。それでも、貰った人が喜ぶ顔を考えたなら、しんどさは感じられませんでした。カーネーションを渡す当日、半年以上楽しめる状態に仕上がって、輝いて見えました。受け取った生徒の大半は、笑顔で、嬉しそうな顔をしていました。その時に、私は、「花で人を喜ばすのも良いな」と思いました。私は、地元である香美市物部町大橋に古くから伝わる重要無形民俗文化財

の「いざなぎ流」という神楽を伝承しています。「いざなぎ流」を学びにシリングボールから来ていた留学生と話をする機会があり、エディブルフラワーに強い興味を持ちました。日本では一般的ではないのですが、海外では花を飾るだけではなく、食べることも多いと聞きました。その時、まず食べられる花ということが想像しづらいと思つた反面、このような食べられる花をヒットさせることができれば面白いと思えました。日本では料理の上に食用菊を「いろどり」として使われる事が多いですが、食べるのは一般的ではなく、高級料理店で扱っているくらいです。日本でもやり方次第でもっと広められるのではないかと思います。大学ではエディブルフラワーも作りたいと思いました。

しかし、農業大学校に入学してから、私のやりたいエディブルフラワーはプロジェクトとしてはできません。やはり人の口に入るものなので農薬の使用が限られることや、買ってくる人が少ないため流通量が少ないなど様々な課題があるようです。このため、インターンシップや農家留学研修を受け、栽培や売り先等についていろいろと教えてもらいたいと思っています。

私の町の産業は主にユズで、大きな選果場や搾汁施設もあります。県内の中山間地域ではユズの生産が盛んで、全国一の産地です。今の物部はユズを使った加工品も作ってはいるものの、

あまり認知されてなく売れていません。もっと物部を知ってもらうためにはSNSが一番効果があると思っています。特に、若い人、自分達が情報発信を積極的に行い、より多くの人に物部のことを知ってもらいたいです。

そこで、私は地元で花、特にエディブルフラワーを栽培し、神楽の常設舞台「いざなぎの間」があるべふ峡温泉と協力し、SNSでの情報発信もしていきたいと考えています。物部産の食材を使った料理を楽しみながら、神楽を鑑賞し物部の文化を知ってもらえる場があるので、ここにインスタ映えを狙った新しいものを入れていくのはどうかと考えたのです。例えば、物部でとれるユズや、シカ肉、自分が栽培したエディブルフラワー、フレッシュやドライの物を使った季節ごとのメニューを地域全体で考えだしていきたいと思っています。同時に、花を食べるイベントを開催するなどして地域外の人も集まってもらえるきっかけを作ることも必要だと考えています。夢を実現するために、日頃から努力し地元の事を考えながら伝統を未来につなげ、伝えられるようにしたいです。そのため人脈を広げ、コミュニケーション能力を高めます。自分たち若者が、今あるものを大切にすることと併せて、新たな物にも取り組み、多くの人を笑顔にさせるための仕組みを作れるようになりたいと思います。



オープンキャンパスでのプロジェクトの圃場説明

最初は嫌だった

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

榎 原 功 己



私が、農大の野菜園芸コースに入学しようと思った最初の理由は、「農業高

卒業したから、まだ働きたくない、最終学歴が高卒は嫌だ、なんとなく先生や両親に勧められたから」などという理由でした。また、家が農家というわけではないので農業の勉強をしてもあまり意味がないかと思っていたので入学もポジティブ

には考えていませんでした。

そして、入学してみると、高校の時は違い、家が農家をしている・していたという人や明確な目標を持って入学したという人が多く、とても驚きました。最初の実習が除草だったことや、高校の時に野菜部門だったということなどから、自分は野菜を栽培することに關して、ある程度なら知っているかと思っていました。そのため、除草中も「なぜ自分がこんな雑用のようなら誰でもできることをしているのだろうか」ということを考えていました。しかし、それ以降の実習で、「畝立て」を畝立て機で行うという授業内容のときに「野菜は畝を立ててからそこに苗を植えて育てるもの」ということを知らず、なぜこんなことをするのだろうか」と考えていました(高校の時は、実習前に先生が畝立てと整地をしておいてくれたから)。入学時からもうすぐ一年がたとうとしている今では施肥↓耕運↓畝立て↓整地↓マルチ張り↓定植という基本の流れは当たり前のようにしていますが、入学時は、機械の使い方方もわかりませんでした。また、畑に定植する作業のときも、セルトレイからそのまま定植していたので、鉢上げをしないことにも驚きました(高校の時は定植前に、セルトレイのままではとりにくいので三寸ポットに鉢上げしていた)。その他にもいろいろなことがあり、自分の無知さを痛感しました。今考えてみると、あのまま農業とは関係のない会社に就職していたら、

親戚などに野菜の育て方を聞かれたときに答えられなかっただろうと思っ

ています。また、農業に対する考え方も少し変わりました。高校の時は、農業をすると土などで汚れる、動物の糞などを肥料にしているのが臭い、汚い、外での作業が多いので重労働、あまり儲からないなどと考えていました。しかし、農大に入ってから、堆肥舎がないので臭くない、機械を使うので運搬なども楽ができる、農業もやり方によっては高収入も狙える、農家実習でイチゴの農家に行ってみると、全然重労働でなく、土にあまり触らないので手も服も汚れないなど、高校の時に嫌だったことや悩みなどがほとんど解決されました。

さらに、トラクターの乗り方なども勉強したおかげで、親戚の農地を持つている人から、「除草のために耕運してくれ」という依頼が来たり、趣味で少し野菜を育てている人から「なんでこれが育たないのか、少し調子が悪いようなので見てくれ」という依頼が来たりします。そのため、親戚の役に立つこともできるし、ちょっとした小遣い稼ぎにもなっています。

以上の事などから、私は今では農大に入学して良かったなと思うし、この先もし農業に関係ない仕事をするようになったとしても、ときどき野菜を育てようと考えています。



ニンニクの土入れ作業

農業への思いと学んだこと

香川県立農業大学校

花き園芸コース 一年

佐 喜 大 祐



私が、農業に初めて触れたのは、まんのう公園で行われた田植えの経験でした。その時に

私が感じたことは、農業は楽しいと言ったことでした。今思うと、当時の自分はとても甘い考えをしていたと思います。農業は確かに楽しい所もありますが、それ以上の大変さと努力が必要であると思います。しかし、時が過ぎて私自身の成長と共にそのような考えは

なくなり、純粋に農業に興味が出てくるようになりました。

そこで、高校進学では農業高校を選択しました。進学した農業経営高校では、最初の一年間は野菜や作物、花き、畜産の農業全分野に加えて加工など、実習や座学により、農業のことを一から学びました。農業に興味はあったものの農業のことは全く分からなかったもので、初めの頃は慣れない作業などに戸惑うことも多くありましたが、実習を重ねるうちに慣れてきました。

二年ではすこく加工に興味を湧き、作物等の栽培から加工するまでを学べる「食農科学科」を選択し、栽培から加工までの工程を学びました。三年の専攻では「作物利用」を勉強し、課題研究では、黒大豆の品種毎に摘心を行い、無摘心と比べてどのように成長に影響するのかを調べました。また、その黒大豆を利用して豆腐に加工しました。

高校生活で特に印象に残っているのは一生懸命取り組んだ課題研究です。一から自分で栽培するうえに栽培方法を少し変えてみたりしたことで、作物を育てることの難しさや苦勞をひしひしと感じました。また、栽培した作物が無事に収穫できたことは格別の思いでした。

暑い日や寒い時の作業はとても辛く、難しい作業もいっぱいあったけれど、それを楽しんで喜びがあるというのが分かってきました。

高校で農業の勉強をしている内に、もっと農業を詳しく学びたいという思

いが強くなり、次のステップに進むべく農業大学校に進学することを決意しました。

農大では花き園芸コースで高校と違う分野の花きの知識や栽培技術を学んでいます。農大で実習を始めた頃は、高校より専門的で、分からないことが多かったけれど、少しずつ理解できて、実習等にも慣れてきました。

農大で学んでいる中で、特に勉強になったのは、十月から一二月の二か月間の農家実習です。私は、加藤洋らん園で、コチョウランについて勉強させてもらいました。実習前に挨拶に行っていたのは、品質の高い高価な商品を生産していたので、自分はここで作業できるのだらうかと、とても大きなプレッシャーを感じました。しかし、実習先の人達がとても優しくコミュニケーションをとってくれたり、作業などを教えてくれたので不安を感じることもなく実習をすることができました。コチョウランの施肥や灌水、苗の整理、出荷準備の寄せ植えや水ゴケ張りなど多くの作業を経験できたり、学校では教えないこともたくさん教えてもらいとてもいい体験ができました。

私の農業への思いは、始めの頃と比べると随分と変わっていったと思います。農業は実際に体験し、自分で一から作物を作ってみる事が大切なことだと思えました。実際に栽培することで栽培知識を深め、暑い日や寒い日に作業し、大変な苦勞をして成果を得ることができると、改めてそう思う事

ができました。私は将来のことについてはまだ決まっていませんが、高校や大学で学んだことを活かせる事に就きたいと思っています。これからの大学生活生活でも、もっといろんな事を学んでいきたいと思っています。



農家実習でのコチョウラン苗出し作業

農業と私

香川県立農業大学校
果樹園芸コース 一年

津田 繁 則



私が農業に興味を持ったきっかけは、祖父が農業を営んでいた事が一番の動

機です。

幼少期より生き物や植物を育てる事が大好きでした。私自身が成長するにつれて、将来的には生き物に関わる仕事に就きたいと考えるようになりました。

そのため、高校は農業が学べる地元
の県立笠田高校に入学して農業基礎を学び、三年生では野菜、果樹、畜産のひとつを選択することとなり大変悩みました。生き物の中でも動物が一番好きなので「畜産か」と、一週間近く悩み、結果、実家が野菜農家なので野菜を選びました。しかし、野菜を学べば学ぶ程、野菜以外の品目も学んでみたいという葛藤がふつふつと湧いてくる日々でした。

野菜を学びながら自主勉強として果樹のことも色々自分なりに勉強し、果樹栽培の面白さが分かりつつある中、進学か就農かの狭間の中、県立農業大学校の果樹コースを目指し、無事入学することができました。

農大に入学して学べば学ぶほど、果樹栽培の初めて知る新鮮さと技術の奥深さを実感する日々です。高度な内容も度々あり、講義についていけないかと不安な時もありました。しかし、先生や先輩方々は難度の高い実技や講義内容が完全に分かるまで、私が何度も同じ質問を繰り返しても、その度に大変丁寧に指導頂き、現在、学ぶことが日々楽しいと感じています。

特に、将来を考える上で大変役立つ農業実践講話は凄腕の多様な農業形態の農家が農家に成るまでのプロセスを

山あり谷あり笑いを交えながら、乗り越えてきた迫力ある内容を生の声で語っていただけて感動そのものでした。私の目指す将来像にイメージを膨らませることができました。

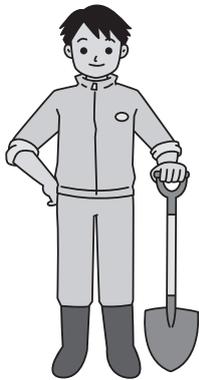
もう一つ、卒業後、直ぐに役立つ事として「農家実習」十月から十二月・週二日間があります。篤農家や農業法人に通い、極めて実践型の農場実習です。農大に比べ経営規模も遙かに大きく、農家や法人の社員の方々の全く無駄の無い手際と動き、時間内に仕上げた作業効率の良さを身に染みて感じました。私自身、農場実習で学んでおり少しでも近づけるように頑張ったものの、全く及ばず、流石にプロフェッショナル、「素直にカッコイイ」と思いました。実習の終盤では丁寧な御指導により少しはそれなりにどうにかという状態までいけました。農業法人への就職も考えており農大の間にいかにプロに近づけるか精進したいと考えています。実習作業以外では土地を購入してから役立つ農業経営のノウハウや国内外の農業情勢に至るまで様々なお話を頂きました。

学校行事でもう一つ心に残っていることは「農大ふれあい市」です。私たちが育てた果実等の農産物やバザーでの「デザートたこ焼き」を作り、一般のお客様に販売したり、農大の学生直売所とは違い、その場で食べて頂き、直接、美味しいと言われると苦勞しただけ嬉しくて涙が出そうでした。また、来年に向けての改善が必要な点も

開催したからこそ分かることも多く、学ぶ事ばかりでした。感動そのものです。最後に私はこの一年間でどれだけ世間を知らなかったのか、そして、祖父を含め農家が言葉にしないが、最新の知識や情報を自ら得ること、日々改善と努力により経営を営んでいるかを知りました。毎年同じ事の繰り返しでは決して無いことも教わりました。私自身の将来設計をより具体的に考えるべき時だと感じました。



カキ「太秋」の難易度高い剪定に挑戦



農業大学校での経験

香川県立農業大学校
造園緑化コース 一年

岩崎 安音



私が香川県立農業大学校に入学しようと思つたのは、実は、農業への興味や、造園業に就

きたいなどの理由ではなく、大学受験に失敗してしまいく学校がなくなつてしまつたのがきっかけです。その時に農大の事を聞き、次の入試までの間に農業を学ぼうと思つたからです。

私は、高校は普通科で家に畑があるでもなくあまり農業には興味がありませんでしたので、次の受験までの勉強のリフレッシュにでもなれば良い程度の考えで入学しました。

しかし、農大で農業の勉強をしていくうちに次第に農業の魅力を感じるようになっていきました。農業という仕事は人間の生命活動のためになくてはならない仕事です。そのため、この分野の仕事は重要視され、世界規模でマーケットが拡大され、多大な利益を得ています。これらの内容に関する勉強をしていくうちに農業に少しでもかかわる仕事をしてみたいと考えるようになりました。そのことから、私は大学受験も農学部で受けることにしました。高校時代は理系の選択をしており、そこま

で勉強は辛くはありませんでした。入試までに私がこの学校で学べることをしっかりと学びたいと思います。

ここからは、私が造園緑化コースで学んだことを説明していきます。まず、そもそも造園緑化コースを選んだのは家の庭掃除を学びたいという軽い考えでした。実際に作業をしていくうちに剪定方法を覚え、家の庭をきれいに掃除できました。他にも学校行事である、ふれあい市はとても印象に残っています。造園緑化コースの出し物の一つのピザにはとても驚きました。なんと専用のピザ釜でピザを焼いていたのです。このピザ釜は造園緑化コースの先輩が作っていたようで、お客様からの評判も良く、ピザを完売することができました。

この農業大学校に入学してから、とても学ぶことが多かったのが、農家実習という農家の仕事を体験する授業です。十五日間の授業で私は造園会社にて体験に行きました。ここでの作業はとても辛く、仕事というものがどれだけ苦しく大変かよく分かりました。

この農大では、とても多くの事を学べます。先生から聞く話や生徒から聞く話もさまざまあり、自分がこれまで考えたこともない考えを聞くこともあります。私は将来野菜や米などをよくおいしくするための研究職に就きたいと考えています。このような考えに至り、農業に関する仕事に就こうと思つたのもこの学校に入学したからです。これから残りの日数は、大学入試

の勉強にさらに励み農業に関する知識も得たいと思います。今思えば、農業大学校に入学し自分の考えを広められて良かったと思います。



ピザ釜

私の夢

香川県立農業大学校
畜産コース 一年

辻 松 麻 衣



私は動物が好きだったので、香川県さぬき市の香川県立石田高等学校へ進学しました。そこ

では、生産経済科へ入学しました。一年生では、肉用牛、採卵鶏、作物の実習を順番で行い、二年生で養鶏を選択して、専攻実習を行いました。養鶏班

では、香川大学農学部との共同プロジェクトで、鶏に寄生して吸血し、産卵率を低下させるダニであるワクモ駆除の静電気発生装置の研究をしました。

また高校三年生の一月には、香川県さぬき市の養鶏場で高病原性インフルエンザが発生し、石田高校も発生した養鶏場と近かったため鶏舎は立ち入り禁止、鶏卵も持ち出し禁止となり、数日間は卵が出荷できない状況になりました。私は、スーパーでアルバイトをしていて、「販売している卵は食べても大丈夫なのか」「安全なのか」との問い合わせが多数あったと聞きました。私はその話を聞いて、消費者に安心して食べてもらえるような卵を作りたいと思うようになりました。これらの経験を通じて、もっと鶏について学びたいと強く思い、農業大学校への進学を決めました。

農業大学校へ入学して、たくさんの専門知識を学んでいます。講師の先生方も農大の先生だけでなく、畜産試験場や畜産課の先生方も教えてくださるので、難しいところもありますが、将来のため日々学んでいます。一年生の夏休みには、大型特殊免許を取得しました。来年は家畜人工授精師など、いろいろな資格にチャレンジしていきたいです。

農大の実習では、主に牛、豚の畜産農家へ行っています。実際の現場で作業をさせてもらうことで、家畜と呼ばれる経済動物にも命があり、人が肉を食べるのは当たり前のことではなく、常

に感謝しなければならぬなど、とても学ぶことが多く将来の役に立っています。

養鶏農家は、衛生面から実習はいけません。見学はいくつかの農家でしました。その中で感じたことは、鶏と接することが少ないことです。大規模な農家は、ほぼ全部が、機械化されていて、人手の作業は少ないということでした。人と鶏が接する時間を減らすことで病原菌の感染を減らし、機械化で効率よく作業できるといふことです。

しかし、私は、鶏と機械越しではなく、直に鶏に愛情をもって接し「うちの卵はおいしい」と胸を張って言えるような働き方をしたいと考えています。ある養鶏場では、ヒヨコから育て卵は手で集卵し、朝どれ卵を道の駅で販売したり、卵を加工してケーキを作り、併設しているカフェで販売していると聞きました。ヒヨコから大切に育てているということで特別感が出て、付加価値がついているのだと思いました。私も卵を生産して出荷をただ行うことでなく、いろいろなチャレンジをしたいと考えています。今私が考えていることが二つあります。

一つは、卵の黄身の色を白と赤の2色の渦巻き状にすることです。高校生の時、卵の黄身の色は、鶏が食べている配合飼料のトウモロコシ色だときいたので、配合飼料をふるいにかけてトウモロコシの代わりに米粉と干しエビを入れ、その二種類の飼料を週替わり

に与えました。しかし卵の黄身の色が黄色と白のマーブル模様になっただけで実験は失敗でした。今後、試験期間を延ばし、飼料を鶏によりよく食べてもらえるように改良し再チャレンジしたいです。

二つ目は、「平飼い鶏」を飼育し、卵を販売をすることです。日本の採卵鶏の九〇%以上は「ケージ飼い」で、私は、鶏が自由に歩き回れる「平飼い」で飼育して自然の中で伸び伸びと育ちストレスのない鶏の卵を販売したいと思っています。

農大の畜産コースは週三日間の専攻実習を行います。私は、養鶏農家畜産試験場の養鶏部門で一年間実習をしたいと思っています。今後、私がやりたいことをできるように努力していきたいと思っています。



養鶏農家の実習